

# 八 金沢市東別院

## へ 納材

父の長い納材歴史の内、井波町松井角平さんへの納材は、最も大得意先であった。松井家の沿革は遠く、加賀前田藩からの下命、云々と歴史は古い。藩命に依り代々伽藍建築師である、先代松井角平さんには子供がなく、現角平さんは親類から、養子として迎えた人だそうである。優秀な人で、当時の東京帝国大学建築学部卒業の学士様であった。大学の建築学部は殆んど洋建築学だそうである。

大正年間、初期頃、富山市中町の角に、岡部呉服店という、木造二、三階建ての、富山では初めてのデパート様式の小さいビルが出来た。この設計者は松井角平さんの処女設計であると評判が高かった。私も母に連れられて、岡部デパートへ行った事を覚えてる。現在は松井建設の相談役で年齢も八十才に近いと思う。別に、松井鉄次郎さんという人がいた。この人は若い頃、数多く徒弟として見習い入門してくる若い衆の内でも、最も規律正しく、人間性も優秀で、職人としては人並以上に優れていた人だそうである。先代角平さんはその将来性を見込んでこの人を養子に迎え、現角平さんの弟分とした。(実際は年齢は角平さんより上だったそうである。)

大正年代で東京帝国大出身の学士様と、小僧上りの職人との二人兄弟では、御兩人同士は大変に仲がよかったそうであったが、下部の社員間ではどうしても、学校出と職人出との軋轢が出来るのは当然である。学校出の社員は洋建築派に、小僧上りの職人は在来工法派に帰属する。大正十二年頃、角平さんは西洋建築を主体に東京へ進出した。当時奥山由雄氏、高柳寅次郎氏等は、角平さんの下で活躍した。鉄次郎さんは井波に残り、在来工法の伽藍建築を主体に事業を継続していた。その間私の祖父及び父は、先代角平さんの遺言を守り、両派の間に立つて仲介役を努めた様子であった。富岡八幡神社は東京であったが、父は井波の職人衆を連れて、東京傘下に入り、亦築地本願寺は鉄骨鉄筋コンクリート造りであったが木造部分は井波の職人派と合同で完成に尽す等、随分と苦勞したそうであった。その鉄次郎さんも昭和十三年七月五日、四十二才の若さで亡くなったとの事である。

大正八年頃、金沢市の東別院の再建工事が松井角平さんの請負で始まった。

工事着手 大正八年三月  
 工事完成 大正十四年十二月  
 総工費 約百二十万円  
 構造 総檜材使用

金沢駅前には平沢材木店があった。この店主は、平別院の建設委員長だったそうである。北陸唯一の羽柄屋さんで、駅前に大きな製材工場もあったそうである。当時はまだ、今日程製材が発達していなかった。第一次世界大戦当時、石川県一の織機用材を、当時は大般の材

現在も金石の越田材木店・越田弥太郎翁もその経過について、私にも語って頂いた事を覚えてる。東別院は総檜造りで、大谷派だから二重屋根構造となり、総銅版葺きで、金沢市内の何処にいても青銅色の屋根が見えたそう、百万石城下の名所の一つになり、北陸最大規模の大伽藍だったそうである。将来は必ず国宝級に指定されるとの評判も高かった様である。現場責任者は松井鉄次郎さん、現場棟梁は角平さん門下の、二大巨星といわれた内の一人、最長老の久村清次郎氏だった。総工費二百二十万円

# こいけものはものがたり

## 善因翁記

(参考迄に、次に述べる富山西別院は半額の六十万円だった。)その別院も昭和三十七年七月二十四日焼失した。現在の東別院は、その後松井建設の手に依り、昭和四十年から四十三年にかけて、富山本願寺の様に鉄筋造りで再建された。総工費三億円との事である。時代が違えばと言えども、貨幣価値の低落も甚だしいものがあると思う。

私は昭和三十年ソ連材の第一船を、金沢市の業者と共同して富山港へ輸入すべく計画をした。何分

初輸入のことであり、不安定な要素も相当にあったので、度々金沢へ打合わせに訪れた。条件は権利・義務、金沢側と富山側半々で、双方の構成員には関係せずという事で決めた。富山側は私の店一人金沢側は先代の通善直次郎氏を筆頭に十二、三名のグループとなつた。金沢側は、故通善直次郎氏、越田弥太郎氏等、老人連の外は、若手連である。まず富山勢は一人とは一寸解せないという意見が大勢だったそうである。金沢勢の老人グループが、富山の小池とは金沢の東別院・専光寺の用材を納材した小池木材店の倅であると説明したら、一挙に決まったそうである。

父はよく言った「善因善果・悪因悪果」私はこの時、先代の信用の厚い事・暖簾の重大さをつくづく味わった。業界は円満に、自身決して高慢であつてはいけなさと教訓されていた事を、しみじみ味わった。

